第5回

高林白牛口二の謡を聴く会

第一部

対談　大倉源次郎　高林白牛口二

第二部

山姥　高林白牛口二

三輪　高林昌司

蝉丸　高林白牛口二　大倉源次郎

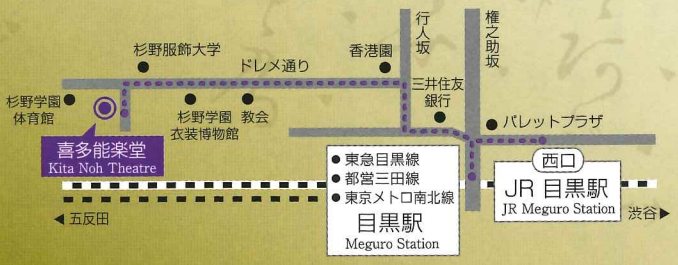
岩船　高林呻二

主催　高吟会

平成30年 6月1日 (金) 午後6時始　十四世喜多六平太記念能楽堂（喜多能楽堂）

● 入場料（全席自由席）¥4,000均一

※当日、山姥の謡本を販売いたします。



〒141-0021 東京都品川区上大崎4-6-9　TEL：03-3491-8813

JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅下車徒歩7分

● お問合せ

※チケットはお電話、メール、ホームページからもご購入いただけます。

【高吟会】

E-mail：koginkai@ares.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~koginkai/

TEL：075-462-1490　FAX：075-463-3494

〒603-8354 京都市北区等持院西町15

【喜多能楽堂ホームページ チケット購入ページ】

http://kita-noh.com/ticket/

背景：わんや刊行謡本より抜粋

第七十八回 喜多流涌泉能

平成三十年六月一日（金）

動静以天地
視哉涌泉美　　鈿之翁

第一部　午後六時始

対談　　大倉 源次郎
　　高林白牛口二

休憩（十五分）

第二部　午後七時始

一曲独吟　山姥　　高林白牛口二

仕舞　三輪　　高林 昌司

一調　蝉丸　　高林白牛口二
　　大倉 源次郎

仕舞　岩船　　高林 呻二

終了予定　午後八時半

主催　喜多流 高吟会

謡の謡い方

高林白牛口二

謡とは何でしょうか？

定義付けとしては、能の中の歌と詞の部分即ち詞章部分を取り出したモノです。能の中の声を使う部分です。能は、謡と舞とで作られています。今回は、その歌舞の内の「歌」の部分である「謡」の謡い方について、論じてみようと思います。

先ず、人間はどのような精神状態になった時に、歌が口から発せられると考えられますか？

歌も舞も歓喜の発露です。生きている事への感謝の念から、発生するモノです。その第一声は、言葉ではなく和らぎの音声です。人間誰でもですが、突然眼前に絶景が現れた時に、どのような歓声を上げますか。必ず誰しもですが、とても静かな息を和らげた音声が、出て来ます。文字で表すとすれば「ウワァー」とか「イヤァー」とか云うような音声でしょう。これが音楽の、特に声楽の重要な発端です。歌の発声は、この音声が原点です。この音声を忘れては、歌は歌えません。

「謡」は声楽の一つです。しかし、現代の謡は全くこの事を、忘れ去っていると思われます。極端な云い方をしますと、喉や腔内、舌も唇も締め付けて、顔を顰めて謡っていては、聴く人に文章の内容を伝える事は出来ません。まして謡の持つ音楽性や、心地好い芸術性印象を伝える事は出来ません。その結果、「謡」とは、言葉の意味をわざと聞き取れないように発声するのか、などと云われる状態になっています。

謡を謡う時は、先ず姿勢を正しくする事が必要です。能の立ち役として謡う場合は例外となりますが、それ以外の場合は、姿勢を正して正座し、身体中の無駄な力みを排除します。中でも最も重要な事は、声の通り道となる喉頭・咽頭・口腔・鼻腔・口舌・口唇等の全てを、柔和にする必要があります。呼吸法も重要です。呼吸法の第一は、吸気は原則として、鼻孔を通じて行う事です。鼻孔から鼻腔へ吸気を通すと、吸気は湿気を帯びます。この湿気は、声帯の保護に不可欠です。第二として、吸気は横隔膜を用いて行う事です。胸郭でも吸気する事は出来ますが、吸い込む空気の量が、三倍以上も違います。充分に吸った息を、効率良く使って謡うと、息の長い美しい謡を謡う事が出来ます。

美しい謡は、人の心に染み渡り、長く余韻を残して歓喜の悦びに浸る事が出来ます。この印象を聴衆に与える事が、声楽の大きな役割です。こんな事を感じながら、今回は「山姥」と対峙しようと思っています。

謡本をご覧になってお聴き下さるのも、宜しいかと思います。

次回予告

平成三十年十一月十日（土）午後一時始
第七十九回涌泉能　於 京都 大江能楽堂
仕舞　天鼓　高林 呻二
一曲独吟　三井寺　高林白牛口二
能　是界　高林 昌司

平成三十年十二月七日（金）午後七時始
第八十回涌泉能　於 東京 喜多能楽堂
（第六回 高林白牛口二の謡を聴く会）
一曲独吟　井筒　高林白牛口二 他
午後六時より第一部として対談を予定しています。

許可無く写真撮影・録音・録画は堅くお断りいたします。
携帯電話など音の出る電子機器は予めお切り下さい。